

Happy Doll Project

10年の歩み

病院の外に出られない子どもたちや患者さんの代わりに、自分の作品が旅をするのはどうだろう？願いをこめて作った Happy Doll たちが、自分の夢を乗せて各地の病院を訪ね、たくさんの仲間を増やし、1年後に様々なストーリーを抱えて帰ってくる。Happy Doll の旅に関わった人たちの心がつながり、病院がつながり、病と向き合う人々の緩やかなネットワークができれば、病院はもっと風通しのよい、温かな場所になるのではないだろうか……。ホスピタルアート活動に訪れた病院で、窓の外をぼんやり眺める患児の沈んだ横顔を見ながら、そんなことを考えていた。

それから、構想と準備に1年を費やし、2006年にスタートさせた Happy Doll Project。

当時は13病院を巡り14回のプログラムと14回の院内展覧会、そして最後に総合展覧会を病院の外で開催して1年間で終結するプロジェクトとして企画していた。しかし、活動が進むにつれて1年ではとても止められない状況になってきた。

「生きる力をもらった。」「気持ちをリレーできるってすばらしい！」「今度はいつ来てくれるの？」・・・そんなありがたい声を各所で頂き、期待にもっと応えたいと思ったからだ。

かくして1年が終了し、作品を返送する時になって突然思いついた。そうだ！自分たちの Happy Doll がどこを旅して、どんな人々と出会い、どんな風に Happy Doll 仲間が増えていったのか？病院で作品の帰りを待つ制作者たちに全貌を報告できる本を作ろう！

そうして終結することができなかったこのプロジェクトは、毎年全国の病院を巡り続け、プログラムを実施し、そこで展覧会を行い、次の病院にリレーし、1年の終わりには猛スピードで記録本を制作し、クリスマスシーズンには作品返却とともにこの本を贈り続けることとなった。

2010年にはNYへ飛び、子ども病院や小児癌の子どもたちと日本の病院をつなぎ、病と向き合う人々のネットワークは国境を越えた。その年のクリスマスシーズンには、全国とNYの病院で生まれた Happy Doll たちが、銀座和光のショーウィンドウを誇らしげに飾った。

いつもは病室で静かに闘う患者さんや、先立った友人たちの作品が、「わたし、ここにいるよー！」と華やかに表舞台に登場し、街行く人々と心通わず光景に、私は心から感動した。

5年目の2011年は東日本大震災が起こった。凄惨な現場に佇み涙し、少しでも被災者の心が落ち着くことを願い、避難所で Happy Doll Project を始めた。以降、刻々と変わる現地状況から仮設住宅や復興公営住宅へと活動場所を移行しつつ東北3県を巡ること4年半。心の応援とコミュニティ再生の一役を担う活動として今や定着し、現地で親しまれている。

昨年は再び国境を越え、震災で頓挫していた南アフリカへ渡った。2つの子ども病院と2つの児童施設を訪れ、エイズや貧困、性的虐待や家庭内暴力が深刻な、厳しい環境で生きる子どもたちとの Happy Doll Project。作ることに飢えていた子どもたちは、まるで乾いた大地に水が吸い込むように表現をむさぼり、圧倒的なパワーで作り続けたのである。

そして今年、Happy Doll Project は10年目を迎えた。全国や世界の病院あちらこちらを旅して出会い、作って、泣いて、笑って、感動して……。振り返れば慌しい障害物競走のようでありながら、一期一会の貴重な出会いと感動の積み重ねであり、夢のようにあっという間の10年であった。

そして、命の現場のこころをつなぎながら、Happy Doll の旅はこれからも続くことだろう。

Founder of Happy Doll Project
高橋雅子

